

# 「映画を創ってみよう!!」実施報告

## 「想いをカタチに」

- 趣 旨：** 子どもたちが実際の映画創りを通して、自分の思いを伝える力や相手の立場に立ち考える力などのコミュニケーション能力を養うことを目的とする。また、創った映画をアジア国際子ども映画祭に出品することを通して、子どもの文化芸術体験活動の普及啓発を図る。
- 日 時：** 平成30年7月14日(土)～16日(月・祝)
- 場 所：** 国立淡路青少年交流の家
- 対 象：** 小学4年生～高校3年生 6組(1組5名前後で申込)
- 参加者：** 6組28名(小学生 男子13名、女子11名)  
(中学生 男子 1名、女子 3名)
- 講 師：** 藤岡 文博 氏(兵庫県立小野工業高等学校)  
馬田 めぐみ 氏(有限会社パートナーズ・プロ)
- ボランティア**  
岩本 教佑 (立命館大学)  
泉 まどか (神戸大学)  
津山 勇大 (吉備国際大学)  
松島 直輝 (吉備国際大学)  
伊吹 史也 (兵庫県立洲本実業高等学校)  
古東 直樹 (兵庫県立洲本実業高等学校)  
宮西 恵津子 (NEALリーダー研修)



### 8 プログラムの内容

#### 1日目 ～シナリオ創り～

今年も3分間の映画創りに懸ける熱い3日間が始まった。集まったのは小学生5組・中学生1組・計6組28名の小中学生。昨年に引き続き参加したグループ、兄弟に勧められて参加したグループ、期日ぎりぎりまでメンバーを募って参加したグループなど、動機や背景は異なるが、どのグループも「映画を創る」ことへの想いや期待は強い。



今年のアジア国際子ども映画祭のテーマは「自己責任」。事前に参加者にはシナリオ作成に向け、あらすじや役者割り、撮影場所などをグループで話し合い、ワークシートにまとめてもらっていた。難しいテーマに困惑すると思っていたが、グループでイメージをしっかりと書き出し、撮影に使う道具や服装までイメージできているグループが多かった。シナリオ創りは、講師の先生に「自己責任」について投げかけられるところから始まった。テーマについて考え直すことで、大きくストーリーが変わったグループもあった。出来上がったストーリーを場面分けし、台詞を考える。書いた台詞を読んでもみると、どこか不自然だ。書いては読んでを繰り返し、納得いくものを創りあげていく。最後にカット割りを考え、カメラアングルを絵コンテに起こしていった。講師の先生からは「風景や感情を表すのに、台詞で伝える方法もあるが、映像で伝える方法もある。そこが映画創りの面白いところ。」という話があった。「夏」を表現するのに、「暑い」と話していたカットを「扇風機」の映像に変えてみる。子どもたちの発想が膨らみ、1つ1つのカットが生き生きとしてきた。

表現したいことを台本にまとめていくために、1日を通して話し合いが続いた。自分のイメージを伝え、友だちのアイデアに耳を傾ける。よいものを創ろうと思うからこそ、意見がぶつかりケンカになる場面もあった。それでも、1日目の終わりには、全てのグループの台本が完成し、撮影に使う小道具や、シーンに合わせたロケ地が決まった。早く終わったグループは、台本を読み合わせたり、カメラアングルを確認したりしていた。イメージが共有されたことで、翌日の撮影に向け、グループの想いが1つになっていくのを感じた。

## 2日目 ～撮影・編集～

どのグループも活動開始時刻より早く集合し、台本や小道具の最終確認をしていた。講師の先生から演技のポイントを教わり、撮影方法の復習をしたら、グループに分かれてロケ地へ出発。初夏の日差しが照り付ける中、所内の研修室やログハウス、グラウンドや砂浜など、思い思いの場所で撮影が始まった。1カットを撮っては、みんなでカメラを囲んでのぞき込む。「声が小さくてテイク2」「台詞を間違えてテイク3」…「カメラアングルを変え



てテイク20」と1カットを20回以上撮り直したグループもあった。自分たちのイメージを映像にするには、グループで協力することが不可欠である。続けてNGを出している友だちに、「1回お茶飲む？」と声を掛けていたわったり、「これでええんちゃう？」と疲れが見え始めた友だちに「もう1回がんばろう！」と声を掛けて励ましたりするなど、グループ内で支え合う姿が多く見られた。また、カットによっては役者の人数が足りなくなる場合もあり、他のグループにエキストラを頼むなど、助け合って撮影を進めていた。疲れや時間と戦いながら、どのグループも夕方までに納得いく映像を撮影することができた。

夜からは編集作業を行った。何度も撮り直したカットの中から、成功したカットだけを探し出し、編集ソフトを使ってつなげていく。つなげてみると5分前後…3分には程遠い。必要ない部分を削除していくのだが、思い入れのあるカットを削るのはとても難しい。講師の先生から「グループの伝えたい事をもう一度確認しよう。」という話があり、グループでの話し合いが続く。撮影の疲れから集中力が切れないかと心配していたが、自分たちの作品が出来上がっていく感覚が心地良いようで、どのグループも活動終了時刻まで編集作業に打ち込んでいた。ここまでの努力が映像として見れたことで、完成への想いがより強くなったことを感じた。

## 3日目 ～仕上げ・完成試写会～

朝食を終えると、どのグループも部屋の掃除を急いで済ませ、必死で編集作業に取り掛かる姿が印象的だった。午前中は、作品を3分に収める戦いが続いた。それと並行して、「波の音」「ガラスの割れる音」などの効果音をつけたり、回想シーンのアフレコをしたりと、作品をよくするために知恵を絞った。最後にタイトルとエンドロールを入れて、作品の時間を確認する…「3分間に収まった！」自然と拍手やハイタッチが起こる。子どもたちの顔に、想いをカタチにできた達成感とプレッシャーから解放された安堵感が広がった。

午後からは、多くの保護者の方がお越しになり、一緒に試写会を行うことができた。子どもたちから苦労したところや見どころを紹介してもらい、それを踏まえて作品を鑑賞した。最後に、講師の先生方から講評をいただき、「0」からモノを創る面白さや苦労、難しいテーマに協力して粘り強く取り組んだことなど、多くの体験から学びがあったことを褒めていただいた。会場全体が温かい雰囲気になれ、事業を終えることができた。

### 9 参加者の声

- 自分たちの力で3分間の映画を創るのは難しかったです。
- テレビで見る映画を創るのはすごいと、やってみて実感しました。
- 編集がすごく大変で苦労しましたが、終わった時の成功感はすごくありました。
- 撮影や台本を創るのが難しかったけど、みんなで協力してできました。
- 仲間の絆が深まったと思いました。
- しんどくても、がんばって乗り越えることが大事だなと思いました。



### 10 所感

映画を創るのは、子どもたちにとって大変な作業である。想いをカタチにするため、3日間意見を伝え合い、意見を聞き合い、意見をぶつけ合う。全ての作業に共通するのは、グループ内でのコミュニケーションである。仲が良いグループだからこそ、つい本音や強い言葉が出て、ケンカになる場面もあった。しかし、作品が完成した瞬間、全ての苦労が報われる。暑さも、疲れも、焦りも、全て吹き飛ばす。完成した作品を見る子どもたちは、皆誇らしげな表情だった。「困難を友だちと乗り越えるからこそ、より大きな達成感が得られる。」という過程に、本事業のもつ教育的な価値を改めて感じた。

